
夢の旅

燕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢の旅

【Nコード】

N7095V

【作者名】

燕

【あらすじ】

完全な事件にブルースは立ち向かったが友が巻き込んでしまった・
・。

終わらない夢の中での旅が始まる！

一、完全なる事件

・・・夢の旅・・・

夜になれば夢を見る。

そんなロマンチックを描く様な夢が現実の様に夢が一日の時間で痛みがあるとしたら・・・。

《ニュース》

「今日、夜11時に完全なる密室殺人事件が起きました。20歳のAさんが不可思議に傷痕も刺された場所もなくただ、そのままな状態で死んでいました。」

ブルース「ふん、完全犯罪とでも言うのか・・・。」

俺はブルース、高校三年で人間。

このニュースの話は嘘の様に感じられるが殺人は本当だったのだ。

毒で死んだのか？

それとも何なのか？

それをも完全に分からないのであれば殺人犯は分からないし自殺とも限られない・・・。

ブルース「母さん、学校行つて来る。」

母親「気をつけて行つてきなよ？」

ブルース「嗚呼。」

ブルースは鞆を持って学校へ行く。

ブルース「不思議だな…完全犯罪、それとも自殺なのか…。」

世界中の中で一番の難易度だろう完全に解くものは誰もいない…。

知っている者は殺人犯と

被害者Aさん…。

だけこの世にいない。

完全密室殺人が出来た人は神に近く…。

原因もなく自殺になったAさんは無料大数分の1にあたる悪運でなければ無理だと思う…。

いろいろ考えてる内に、学校は目の前まで近づいた。

俺は結局分からないままで人生を歩まなければならない…。
けど、知りたいと思う気持ちが人間の本能が発揮するのだ。

レッグ「よっ！ブルース！今日の殺人事件見たか？」

ブルース「嗚呼、見たけど殺人事件とも限らないぞ？」

こいつはレッグ、友達であり親は警視庁である。

レッグ「…ちよつと耳貸して？」

レッグはキョロキョロと周りを見て誰にも知られないように俺の耳に近づく。

ブルース「何だよ？」

レッグ（あんな……それでな……。）

ブルース「それ本当か！？」

レッグ「嗚呼、それが今日初めてじゃないらしいんだ。何回もこの事件は起きてるらしい。それがその話に全てが偶然に共通点何だよ。」

ブルース「…まじか。」

レッグ「今日俺そこに行つて見る事にした！」

ブルース「あつ、危険だ！行くな！！」

レッグ「まあ、大丈夫だ 気にしない 気にしない」

ブルース「…（そう言えば、レッグの性格だったなあ。 気になった事は何でも突っ込みたがるんだよね。）」

そして、授業も終わって学校帰りとなった。

ブルース「あまり危険な事に首を突っ込みなよ？」

レッグ「わゝた、わゝた。」

本当に分かってるのか？ブルースは更に心配になってしまう。

ブルース「じゃあな。」

レグ「おう」

二、さらば友達・・・（前書き）

ブルース「だから言ったんだ・・・レッグの馬鹿野郎おお!!」

二、さらば友達・・・

今日は何時もの様に、朝になって雀の囀りが聞こえて来る…。

だが、何故か、気持ち的には、妙に静かだった。

ブルース「母さん、おはよう。」

母親「あら、もう起きたの？今日は土曜日よ？」

ブルース「まあね、朝飯…食べたくて。」

ブルースの気持ちは今日の静けさで起きてしまう。雀の囀りで静けさはない筈だが…他の意味で心の中が静けさを感じた。何だろう…

寂しい感じ…。

《ニュース》

「ニュースです。ええ、今日も不思議事件が起きました。警視庁の息子、レッグさんが、不思議な事件で翌朝死亡確認をされました。」

ブルース「…！？レッグ！！」

何と、レッグは死んでしまったのだ…。
不思議事件と言うのに

…。

ブルース「…（やはり言う通りだった。…くそっ！俺がちゃんとしていなければ…！）」

ブルースは悔やみ続けた

…。

今日の心の静けさはこの悲しみだった。

レグ「さようなら。」

… 月曜日

葬式となった…。

母親「…元氣を出しなさい？」

ブルース「…うん。」

ブルースは正装を来ていた。

ブルース「レグ…。」

ブルースはレグの内緒話を思い出した…。

レグ（あのな…いくつかの共通点があつてなあ…この不可思議事件で死んだ人は皆寝る時刻から午前1時内に死んでるんだよ。）

ブルースは”二つ目の共通点”をこの目で確かめる事にした。

レッグの為に…。

ブルース「母さん、少し…外を歩くよ。空気を吸いたい…。」

母親「分かったわ。」

ブルースは母親を騙して

”二つ目の共通点”を探した。

その”二つ目の共通点”を知った時…。

それは死のカウントダウンが鳴る…。

レッグは言っていた。

その死のカウントダウンは実在している。そして俺は”二つ目の共通点”を見つけ出した。

それはそれはある街のビルとビルの間に”二つ目の共通点”があった。

ブルース「…此处が共通点か…。」

占い師「君も占いをしに来たのかい？」

すると後ろに人がいた。俺はつい慌てて後ろを向き相手の目を見てしまった。

ブルース「…。」

占い師「まあ、そこに腰掛けなさい…。」

占い師は椅子に指をさした。

そしてブルースは占い師に話を聞いた。

ブルース「昨日俺と同じ同クラスのレッグは来ませんでしたか？」

占い師「ああ、来たよ。けどあの子は人生として死んでしまいましたからね…。」

ブルース「人生として？」

…貴方に、レッグは何か言ってますでしたか？」

占い師「確かに言っていたなあ…。私の占いにケチを付けました。」

ブルース「何と？」

占い師「お前の占いは…死の宣告ではないのか？と聞いて来ました。」

ブルース「死の宣告？」

占い師「はい。貴方は死の宣告を好きに選択出来ると…。」

ブルース「死の宣告を選べれる？そんな事を…」

占い師「はい。」

ブルース「そうですか…。いろいろ話して頂き有り難ございます。俺は失礼します。」

ブルースは立とうとした時…。

占い師「ちょっとお待ち

…？」

ブルース「…？」

占い師「見える…。貴方の夢は良い夢が見えるでしょう。」

占い師は水晶玉と言ったのを見ていた。

ブルース「…どうも。」

ブルースは家へと帰ったのだった…。

占い師「…くくくつ良い夢を…ご覧あれ…。」

次の話へ…。

二、さらば友達・・・（後書き）

さらばレッゲ・・・。

また会う日までこの俺が・・・

三、夢縛り

占い師の占いが共通点と言っていた…。

それが何の共通点なのか

ブルース「結局何も分からなかった…。」

ブルースは布団の中へと入り眠りにつく事にしたのだった。

そして…。

ブルース「ん？」

ブルースは夢の中を見た

…。

すると夢の中には四脚足の大きい猫の様なのが、俺を見つめてきた…。

特徴はふわふわとした額と首周りには毛が沢山あった。

ブースター「ブルース…金曜日ぶりだな…。」

ブルース「…何を言っている？お前なんか知らないぞ！？てか、動物が喋ってる！？」

ブースター「酷いな？俺を忘れたか？

それに、仕方ないだろう？

俺は、”ポケモン”になっちゃったんだから…。」

ブルース「はあ？

何を言ってる？

ポケモンとか何とかって…。」

ブースター「…もう、めんど！…レッグだよ、レッグ！

…本当に忘れたか？」

ブルース「えっ…？」

レッグ「どうやらお前も占い師にあつた見たいだな？」

ブルース「何を言っている？お前がレッグだと？猫の言うことなど信じられるか！？」

レッグ「そうだよな…。こんな姿になっちゃったからな…。信じてくれる訳がないか…。」

ブルース「そうだ、これは夢だ。猫が喋る訳がない…。」

レッグ「ブルース、この夢は普通の夢ではない。お前は”死の宣告”を予言されたからだ。だがあれは死の宣告ではなく夢縛りの宣告だったんだ…。」

ブルース「”死の宣告”？何を言ってる？」

レッグ「言ってなかったか？今日貴方は良い夢を見れると…占い師に言われなかったか？」

ブルース「あつ…。」

レグ「はあ、やつちまったか…。もうお前は夢から目覚める事は出来ないだろう…。」

ブルース「夢から出られないだと？」

レグ「そうだ…お前は夢縛りにやられた…一生だ…人間だった俺達はもういないだろう…。」

そしてお前と俺は、これから”ポケモン”として生きるのだ。」

ブルース「さつきからポケモンって何だよ!？」

それに、人間だった俺達はもういないってどういう意味だよ!？」

レグ「ポケモンと言うのは種族だ。人間で言えば人間だ。これからお前はいやブルースは……………」

ブルース「何だ？」

すると猫^{レグ}の体が薄くなる様に消えて言った。

そして…。

く夢の旅く

これから自分は新たな自分となり、本来の体は死んで魂だけが夢の中へと行くのだから…。

いざ、ポケモン編へ…。

四、ポケモン！

ブルース「レッグ…。」

すると眩しい光が俺の魂を包み込んだ。

ブルース「うつ、何だ！？眩しくて目が開けられない…！」

やがてその光は消えていく…。

突然俺は意識をなくして夢の中で倒れた…。

ポケモンの世界で新たな人生を歩む事になるのだ
った…。

ポケモン編…

ブルース「うつ、此処は
…？」

目が覚めた時は小さな家で布団に入っていた。

俺の横には一匹のポケモンが眠っていた。

ブルース「…うつ！」

頭の頭痛が酷かった。

ポケモン「んゝふあゝ！あつ、起きたの？」

ポケモンは背筋を伸ばして眠気を取った。

その姿は大猫で体の体毛はピンク色で額には赤い宝石があり尻尾の先が二股になっている…。

ブルース「誰だ、お前は？うつ！」

するといきなりポケモンは俺の懷にパンチを入れてきた。

ファイン「人が看病してやったのに、何よ！その態度は！？…それと私はファイン！貴方は？」

ブルース「…あつ、看病してくれたの？有り難。俺はブルースって言うんだ。」

ファイン「へえ、良い名前ね。貴方、種族はブラッキーなのね。ここら辺じゃ見かけない顔だけど？」

ブルース「ブラッキー？何だそれ？俺は人間だぞ！？」

ファイン「人間？聞いた事ないわよ？それに貴方はブラッキーなの、自分の体を見れば分かるでしょう？」

ブルース「えっ？」

ブルースは体を見た。

すると俺の体は猫みたいに黒猫で体中に模様がついている。
黄色いわけの模様。

ブルース「なっ、何で俺、こんな姿になってんだああああ!!」

ブルースは大声で叫ぶ。
すると…。

ファイン「五月蠅い！」

ブルース「ぐはあっ！」

また懷に今度はさつきより強めに入れてきた。

ブルース「何す、ぐはっ！」

ファイン「何じゃないわよ!!五月蠅いの!分かる!？」

計三発…。

ブルースは気絶してしまった…。

ファイン「あっ、やり過ぎちゃった…。」

ポケモン編突入・・・

五、ウィッシュバッジ（前書き）

八つのバッジを集めると願いが一つだけ叶う・・・！？

そしてレッグの目撃者が！！

五、ウィシュバツジ

ブルース「…うつ、どうして俺…眠ってたんだっけ…。」

ブルースはヒリアの方を見ながら記憶前の事を思いだそうとする
とだんだんと恐怖が皮膚全体に行き渡って来た。

ブルース「ひいゝ!!」

フィリア「…ふぁゝ、

…起きたのね。…って何を怖がってんの？」

ブルースの記憶の中には懐に三発もぶち込んで来たフィリアを思い
出した

…。

ブルース「怖い！」

フィリア「はあ？」

ブルースはフィリアから離れた。

フィリア「何をそんなに恐がるのよ。失礼ね！」

ブルース「お、お前が懐に殴って来たからだ！」

フィリア「それは貴方が大声ですからよ！貴方が悪いわよブルース
!!」

ブルースとフィリアは言い争っていた。

ブルース「もう良いよ！俺が悪うござんしたあ！！」

フィリア「分かれば良いのよ分かれば！！…ふふふ」

ブルース「な、何だよ…。」

フィリア「口喧嘩楽しかった」

ブルース「…変な奴。」

フィリア「けど…本当に見かけない顔…。」

ブルース「…そりゃあそうだな。（人間界に住んでたしな。）」

フィリア「昨日も見かけないポケモンがいたんだけど観光客かな。」

ブルース「昨日も？」

フィリア「そう。確かあ種族はブースターだった。けど見かけない顔…。名前は確か…レッグ」

ブルース「…えっ？」

フィリア「うん、レッグだった。」

ブルース「そっ、そいつは何処だ！？レッグは何処だ（俺もポケモンになっちゃった…て事は、レッグもなっているって事だ…あの、夢は本当だったのか…。）！？」

フィリア「えっ、このタウンにはいないけど…うん、何処へ行ったのかは私には分からないよ。」

ブルース「そいつは俺の友達なんだ！！俺はそいつを探す為に来たんだよ！」

フィリア「友達だったの？けど、落ち着いて！」

ブルース「落ち着いてはいら…」

フィリア「落ち着いてられないのは分かる…。けど、今は夜なの！この地域は特に危険だから朝になるまで待ちなさい。」

ブルース「危ない？」

フィリア「明日になったら話すわ。今日は堪えて？」

ブルース「……分かったよ。」

レッグを見つけた…。

けど、夢以外は、目合わせもしてないが、レッグが生きているなら探すんだ。

友達の為に…！

そしてブルースは眠りに落ちた。

すると夢の中にまたレッグが出てきた。

レッグ（よっ！）

ブルース（レッグ！）

レッグ（時間がないから聞いてくれ・・・。
確かな情報だが人間界に戻る可能性があるらしいんだ。）

ブルース（えっ！？それは本当か！？）

レッグ（ああ、それは八つのウィシュバッジをゲットする事らしいんだ。）

ブルース（ウィシュバッジ？）

レッグ（そうだ、ウィシュバッジにはジム戦と言う試合を合格しなくてはならないらしい。だから俺達は仲間が出来るろう・・・。

その・・・ときは・・・。）

ブルース（れ、レッグ？レッグ！？）

夢の中のレッグの姿は消えてしまった・・・。

人間界に帰れる方法は・・・

バッジを八つ集める事

その名は

「ウィシュバッジ・・・」

戦いの幕が今…開く。

六、決心（前書き）

チャンピオンに勝てば願いが叶う!!

六、決心

翌朝・・・。

太陽の光が強引に目を覚まさせた。

ブルース「眩しい！」

ブルースは身体を素早く起こした。

レッグ（ウィシュバッジを集めれば願いは叶うらしい…。

ブルースは仲間ができる筈だ。）

ブルース「レッグ…（ウィシュバッジって何だ…願いが叶うなんて…信じられない。それに仲間って…。）」

するとブルースの横に眠そうなファインがいた。

ファイン「ふあゝ！んゝ…起きたの？」

ファインは瞼を擦っていた。

ブルース「…って！！何で布団一つで一緒に寝てんだよ！？」

ブルースはファインから少し離れた。

驚いた理由は異性と一緒に寝るのは初めてだったから。

18才で若い俺が早くも一緒に寝るなんて！

ファイン「どうして驚くの？」

ブルース「だ、だって！一緒に布団の中で寝てるなんて！」

ファイン「それ驚く事じゃないと思うよ？」

それに、その布団は私のなのよ？」

ブルース「えゝ、何、その驚きのない顔は…。」

あつ、そういえば！聞きたい事があるんだがいろいろ教えてくれないか？」

ファイン「聞きたい事？まあ、良いけど…。」

ブルースは聞きたい事がたくさんあった。

ブルース「それじゃあ一つ目は、ウィシュバッジって何なんだ？」

ファイン「えっ！？ウィシュバッジを知らないの！？」

ブルース「わ、悪かったな！知らなくて！」

なんか本当に知らないのに知らなくて恥ずかしい様な気分だった。

ファイン「まあ、教えてあげるわ。…ウィシュバッジっていうのはね！？八つ集めと願いが叶うの！けどその一つ一つにジムリーダーって言うシティーやタウンの代表で強敵揃いが持っていて、勝てる

人がほとんどいない程なの！」

ブルース「代表！？強敵！？」

ファイン「うん。けど最後のバッジは勝ち抜き戦になって、ポケモンリーグ戦って言うんだけど誰が一匹になるか！

その一匹になって、団体戦で勝ち抜いたポケモンは最後に団体戦のチャンピオンと戦うの！

チャンピオンは最強の中の最強！」

ブルース「厳しいな！結局願えるのは、チャンピオンに勝った一組だけって事か！？

て事は、チャンピオンも願える事が出来るのか！？」

ファイン「いや、チャンピオンが勝っても願いを叶わない事になってる」

ブルース「それじゃあチャンピオンは勝っても負けても得しないじゃないか？」

ファイン「まあ、そうだけど。でもそのかわりに王にはなれるの！王になれば法律を好きな様に作れたり」

ブルース「法律！？」

ファイン「そうよ。チャンピオンに勝てば願いは叶えられるわ」

ブルース「そうなのか・・・そういえば団体戦って言ってたな。個人戦ってあったりするのか？」

ファイン「良く分かったわね。個人戦はトーナメント戦…」

トーナメント戦で1～6位のポケモンは団体戦で組んで戦う事が出来る、いやしくはないかな。

あと！1位のポケモンは王になれる事！

個人戦だとバッジはいらないの」

ブルース「個人戦は王を決める戦いなのか！？」

あと、バッジがいらないって事は、誰でも出場出来ちゃうんじゃないのか…？」

ファイン「いや！バッジはいらない、けど個人戦はポイント集め！」

ブルース「ポイント集め？」

ファイン「うん！

まず、個人戦に参加するポケモンは一匹100ポイント（P）を所持する事が出来る。

そのポイントを多く集めた者がトーナメント戦にでる事が出来るの！」

ブルース「まさか、そのポイント集めって…奪い合いつて事！？」

ファイン「そゆ事

多分、1000匹いやそれ以上のポケモンが、出場すると思うよ？」

ブルース「そ、そんなに！？」

ファイン「うん。

あと、ポイントを全てなくなったらそのポケモンはリタイア！
王になれる戦いから外れよの。」

ブルース「まじかよ!？」

ファイン「うん

個人戦は、王を決める戦い、それから団体戦の6匹メンバーのチャ
ンピオンにもなれる戦い。

団体戦は、願いを叶う為の戦い…。
勉強になった？」

ブルース「成る程…、団体戦にでて勝てば、俺は人間界に帰れるつ
て事か…。」

ファイン「えっ?人げ…?」

ブルース「よし!決めた!ポケモンリーグに出て絶対に勝つ!」

ファイン「えゝ!?!出るの!?!」

団体戦出場…

七、旅立つ者！（前書き）

ファイン「ブルースがそこまで来て欲しいなら、良いわよ。

どっかの馬鹿が森でさ迷いそうなポケモンがいそうだからね！」

ブルース「どっかの馬鹿って俺の事か！」

ファイン「さあ？」

七、旅立つ者！

ブルースはジムリーダーを倒す事を決心し、バッジ7つと最後のバッジを含め、ゲットするためにバッジを集めてきた者達と戦う。そして、最後…チャンピオンを倒し人間界へ戻る事！ブルースは、旅をするのであった。

そして、ブルースは、ファインの手厚い看病をしてもらって…でもなかった様な気もするけど…感謝をしている。

お別れも寂しい気がするが…。

俺達はファインの家の前で別れをつげた。

ブルース「お世話になったよ。有難う、ファイン。」

ファイン「うん。気をつけてね。夜はとにかく警戒する事よ？」

ブルース「え、何で？」

ファイン「何でって！？夜になると盗人がうろついてるのよ！

はあ、なんか心配…貴方一匹、夜を歩かせるなんて…。」

ブルース「俺を子供扱いしてなかったか今？」

ファイン「いいえ、さあバッジを集める戦いへ…頑張つて。」

そしてファインは家へとゆっくり歩いて向かっていた。

ファインの心の底に寂しい気持ちがあつたような心細い気持ちを薄々と感じた。

きつと彼女も別れが辛いのだろう。

ブルース「なあ！ファイン！」

すると、ファインは足をとめた。

ファイン「…何？」

ブルース「…何処行けば良いんだっけ？」

ファイン「なっ！これから行く場所も知らないの！？」

ブルース「悪いな。」

ファイン「はあ、ここから…！」

ブルース「だから一緒に旅へ、…ついて来てくれないか？」

ファイン「えっ！？」

するとファインはブルースの発言に戸惑った。

ブルース「一緒に行ってくれよ！バッジの場所とか全然分からないから。一緒に旅をしてくれ！」

ファイン「はあ！？だ、誰がそんな旅なんかに私が行かなくちゃならないのよ！？」

ファインは顔を赤く染めていた。

ブルース「い、嫌なら良いんだぞ？べつに。」

するとファインはブルースの顔と正反対に向いて、顔を見せなかった。

ファイン「けど、どうしても言うなら行ってあげても…／＼／」
ファインは地面にのの字を書いていた。

ブルース「えっ、良いのか！？なら一緒に来てくれ！！」

ファイン「…／＼仕方ないわね、行ってあげるわ！馬鹿一匹が夜に迷い歩かないように私が一緒にいて来てあげるわよ！！」

ブルース「だあれが馬鹿だ！」

「まあ、宜しく頼むぜ！？ファイン！！」

ファイン「ええ！」

二匹は握手をした。

約束の握手を…。

ハ、一掃！（前書き）

ブルース「やっと一つ目のバッジだ！」

フィン「あまり調子こいてるとこてんぱんにやられるからね？」

ブルース「嗚呼、分かってる！」

一つ目のバッジのキーワードは一掃！

ハ、一掃！

ブルースとファインは旅に出た。

バッジを集める事、それから…友を探す旅でもある。

ブルース「此处に一つ目のバッジがあるのか？

ファイン？」

ブルース達は此处、ライトニングシティーに到着した。

ファイン「そうよ。

…それよりブルースあん？勝てる見込みはあるんでしょうね？」

ブルース「分かん。」

ファイン「は？」

ブルース「だが戦ってみなければ分からないだろう？」

ファイン「まあ、そうだけど…。」

ブルース「それより相手は誰か知ってるか？」

ファイン「ああ、少し待ってて。」

するとファインは自分のリュックから「我等地方のガイドブック」と言う、ぶ厚い本を出した。

ファイン「一つ目のバッジは”雷の根性”相手は二匹、鼠ポケモンのライチュウと泡吐きポケモンのシャワーズ！二匹のコンビネーションは数多いポケモン達を一掃する。」

ブルース「一掃ね。」

ファイン「ジムリーダーの顔が載ってあるけど、見る？」

ブルース「あ、ああ。」

ファインはブルースに本を手渡しブルースは対戦相手の顔を確認した。

《ライチュウ》

No.26

タイプ、電気

特製、静電気

尻尾を地面にさして電気を逃がすので、自分自身は痺れない電気が溜まら過ぎると、筋肉が刺激されて攻撃敵になる。

《シャワーズ》

No.134

タイプ、水

特製、貯水

体の作りが水に似ている、水に溶けて姿を消すことができる。
全身の鰭が小刻みに震えだすと数時間雨が降る。

ブルース「って、何かやばそうな雰囲気だな。」

ファイン「やめる？」

ブルース「誰がやめるか！俺は願いを叶えて人間界に帰るんだよ！」

ファイン「人間界って何のよ？そっぴえばあの時も言っただわね。」

ブルース「嗚呼、俺はポケモン？になったらしいが実際はポケモンではなく人間なんだ。」

ファイン「人間って何？生き物なの？」

ブルース「そうだ。簡単にいえば種族だ。俺はその種族だったんだ。」

ファイン「可笑しい話ね。人間？からポケモンになったって事？そんなの聞いたことないし、信じられないわよ。」

ブルース「俺も信じられない。だが事実だ…。友達も人間なんだ。」

ファイン「あのレッグとか言うポケモンも？」

ブルース「…そうだ。」

ファイン「…。」

沈黙した真っ直ぐなブルースの眼を見たファインは偽りの眼だとは思わないとファインは、ブルースを信じたのだった。

ファイン「…はあ、手伝うわ。」

ブルース「えっ？」

ブルースはファインに顔を向けた。

ファインはブルースと眼が合う前に目をそらして、頬を赤くしていた。

ファイン「手伝うって言ってるの。貴方を、人間界に返す手伝いをするって…言っただのよ…。」

ブルース「…ファイン。有難う。」

するとファインは完全に体を反対方向に向けていた。顔は既に赤く染まっている。

ファイン「べ、別に！ただ私は、こんな下らない旅を速く終えたいだけよ！それに！貴方とは、別られるしね／＼！」

ブルース「えっ？じゃあ何でついて来…。」

ファイン「理由なんて何もないわよ！た、ただ！貴方が心配で仕方なかったのよ！

私がいないと貴方はきっと迷うだろうと思って！だから！か、感謝してよね！？ブルース／＼！」

ブルース「だから餓鬼扱いはやめろって！…でも、有難う。」

ファイン「ふん／＼！」

するとファインは、ブルースの近くに来て俺の手に自分の手を乗せ

てきたのだった。

ブルース「えっ？」

ファイン「ふん／＼！」

さあ、行くわよ！さつさとバッジをとって終わらせるのよ／＼！」

ファインはブルースの手を取りジム戦の所まで引っ張った。

ブルース「痛いって、もうちょっと優しく……」

ファイン「貴方に優しくする筋合いはないわよ／＼！」

ブルース「冷たいな」

そしてブルース達はジム戦へ着いたのだった。

此処のジム戦の雰囲気はお寺の様な感じの大きい扉だった。
これはやっぱり、ジム戦に入る前にする事、それは！

ブルース「たのも〜！」

ファイン「古いわね……」

ブルース「まあ……な。」

すると扉が開くと「ぎざぎざぎざぎざ」と言う如何にも古そうな気分が現れてくるジム戦。

そして、ブルースとファインは恐る恐る中へと入ると扉は自動的に

閉まってしまった。

ブルース「招待してくれたようだ、けど前が見えないし暗いな。でも、なぜか暗かった目先はすぐに慣れて、前がはっきりではないが見えやすくなっていた。

それに、俺の体中についてる黄色いわつか模様も光ってるし！」

ブルースは独り言を言いながら歩いていった。

ファイン「…怖いよ。」

するとファインはブルースに近づき、まるでしがみつく様に俺の後ろに歩いた。

ブルース「歩きにくいだろう？」

ファイン「だ、だって暗いの怖いんだもん！」

ブルース「はあ。」

溜息をついていたブルース。

けど、ファインが可愛いなという気持ちで一杯だった。

何分か歩いていると、更に普通ぐらいの扉が見えてきた。

扉へ近づくと、また扉が自動的に開かれると暗闇に光が指した。すると光の先には試合の様なフィールドの様な物が目線に入った。

ブルース達は少しずつ足を動かし光のある部屋へと入った。

ブルース「…これは？」

するとブルースの見た先には、ポケモン同士が戦っているのが見えた。

ファイン「あれはポケモンバトルよ。」

ブルース「ポケモンバトル？」ブルースは好奇心でポケモン同士の戦いを見ていた。

どうやら2対6の戦いだった。

2匹の方はあの本に載ってあったライチュウとシャワーズだった。6匹の方は見たことがないが、どうやら挑戦者の様だ。

ブルース「幾らなんでも2対6はセコくないか？」

ファイン「そうね、けど挑戦者の方がかなり息が上がってる見たい。」

ゴリキー「空手チョップ！」

シャワーズ「電光石火ああー!!」

シャワーズは素早い足で逃げようとしたがのだが…。

フーディン「サイコネシスー!!」

シャワーズ「しまった!」

カイリキー「よし！気合いパンチ！！」

シャワーズ「かはっ！」

すると筋肉系のポケモンがシャワーズに殴りでシャワーズの懐に当たった。

ブルース「い、…痛そうだな。」

カイリキー「よし！まず一ぴー！？」

シャワーズ「…くくくつ。」

やられていたシャワーズが突然笑みを出した。

カイリキー「何！？」

するとシャワーズは急に溶けだした。

カイリキー「まさか！」

シャワーズ「そう、『溶ける』よ。」

シャワーズが体が水になって溶けるとカイリキーの体中に濡れていた。

ライチュウ「一気に決めるぞシャワーズ。」

シャワーズ「ええ、勿論よ！」

カイリキー「な、何をするつもりだ…？」

シャワーズ「雨乞い！」すると自ら雨乞いを作りだしこの広いフィールドと空が見えない中で雨雲を発生させた。

ブルース「何をする気だ？」

そして雨が降りシャワーズは雨に当たらない所、そして地面が湿っていない所に待機した。

すると、ライチュウは自分の尻尾をなるべく湿っていない所まで地面をなるべく深く刺した。

ブルース「…尻尾を地面に刺して…電気を逃がす…自分自身は痺れない…まさか…！」

フリーディン「しまった！皆！雨に打たれてはいかん！」

ライチュウ「…チェックメイトだ！喰らえ！『十万ボルト』…！」
そして天、中、地…

彼等は逃げる事なく雨が最大の雷をフィールド全てに…

…濯ぐ…！！《ゴゴゴゴオオオオ…！！》

挑戦者達「ぐああああああ…！！…！！」

そして挑戦者達、合計6匹が一瞬にして戦闘不能…。

ファイン「…すごい。」

ブルース「強つ！本に書いてあったが…これが……一掃…」

そして2匹だけで6匹相手にしたジムリーダー。

フィールド全体を雷にしてしまう強敵…。

何匹掛かってこようと一瞬にして一掃させるこの強さにブルースと
ファインは立ち向かえるのか！

九、人間界へ帰る為に！（前書き）

ライチュウ、ブルース『最後まで眼を開けていた者が勝ち！』

九、人間界へ帰る為に！

ブルース「あれが…ジムリーダーの戦い方なのか…。」

ファイン「予想以上に…強い！」

そして挑戦者達は足を引きずりジムを出て行ったのだった。

そしてライチュウ達は漸くブルース達の存在に気づいた。

ライチュウ「やあ、挑戦者かい？」

ブルース「あつ！」

ファイン「はい！ジム戦をお願いしますー！」

シャワーズ「うーん、けど戦いを連続にやるのは疲れちゃうわ…。」

ライチュウ「それに、フィールドの状況で俺達が有利だからな。」

ブルース「確かにそうだな。」

ファイン「うーん、どうするブルース？」

ブルース「時間潰しでもしようぜ。」

ファイン「時間潰し？何するのよ？」

ブルース「…考えてないなあ。」

ファイン「ええっ!？」

ライチュウ「なら、このフィールドが乾くまでお茶でも飲んでいくか？」

ファイン「い、良いんですか!？」

シャワーズ「そうねえ、せっかく来てくれたのに申し訳ないわね。」

ブルース「強い上に優しいな、このポケモン達…。」

ライチュウ「決まりだな？案内するよ俺の家まで。」

ファイン「はい!」

ブルース「それじゃあお言葉に甘えて…。」

そしてブルース達はライチュウとシャワーズに付いていった…。

ライチュウ「そういえば自己紹介がまだだったな？俺は…。」

ブルース「ライチュウですよね?」

ライチュウ「えっ?」

シャワーズ「確かにライチュウだけどそれは種族だから名前じゃないわよ?」

ファイン「確かに。」

ブルース「えっ？けど、あの本に大きくライチュウって名前が書いてあったんだが…シャワーズも…。」

ライチュウ「えっ？」

シャワーズ「どの本見せてよ？」

ファイン「ああ、はい。この本です。」

4匹は一つの本を見た。

シャワーズ「どれどれ？」

ブルース「ほれ。」

シャワーズとライチュウは本を持ったまま黙り込んでしまっていた…。

ファイン「あら…見せなきゃ、良かったかも…」

シャワーズ「…何で種族で私たちの名前は載ってないのかしら…。」

ライチュウ「きつと…俺達は邪魔な存在何だよ…名前なんて…俺達なんてどうでも…………。」

シャワーズ「そうね…、私たちは生きてはいけない存在なのよ…、神に見放されたのよ…………私たちは…………。」

ファイン「そ！そんな事ないですって!？」

ブルース「…（なんて凄いネガティブな二匹なんだ…凄い面も優しい面もあるけど…切実な面もあるのか…この二匹、かなり可哀相だなあ…。）」

ファイン「私は貴方達の事をとて尊敬してますよ!？」

ライチュウ、シャワーズ「…えっ？」

ファイン「貴方達の戦いを見ました!自分達よりも数多いポケモンを…不利な状況でも貴方達は恐れずに一步も逃げずに戦っていて、私は猛烈に感動しました!

貴方達はこの世界にいてはいけない存在ではないと私は思います!」

ライチュウ「…うつ、君!」

シャワーズ「このポケモン、良い事言ってくれるわ……。」

二匹は嬉しい涙をぽろぽろと流していた。

ライチュウ「うわぁ!君は何て良い（挑戦者）ポケモン達なんだ!」

ブルース「…（喜怒哀楽の激しいポケモン達だな。って、ファインまで感涙してるし!

ファインってあんな優しいポケモンだっけ?）」

ブルースはファインと初めて会った時の事を思い出した…………。

ブルース（うつ、此処は

……?」

・・・うつ！)

俺はあん時ファインの家

ファイン(ふぁゝ！起きたの…？)

ブルース(誰だお前は？うつ！)

問い掛けたら…

ブルース(ぐはぁっ！)

患者なのに遠慮なく攻撃をしてきたファイン。

ファイン(人が看病してやったのに、何よ！その態度は！？・・・
それと私はファイン！貴方は？)

あれは確かに自分が悪かった…。

けど……。

ファイン(人間？聞いた事ないわよ？それに貴方はブラッキーなの
貴方の体を見れば分かるでしょう？)

ブルース(えっ？)

ブルース(なっ、何で俺こんな姿になってんだああああ！！！)

ファイン（五月蠅い！）

ブルース（ぐはあっ！）

また懷に今度はさつきより強めに入れてきた。

ブルース（何す、ぐはっ！）

そしてまた…一発。

ファイン（何じゃないわよ！！五月蠅いの！分かる！？）

頭の中でファインの優しい所を思い出して見たが全く優しいとは思えず、ブルースにとっては鬼の様な存在だったかも知れない…。

けど……。

ファインは…

ブルース（俺は何としても願いを叶えて人間の世界に帰りたいんだ！）

ファイン（…分かった、手伝うわよ。）

ブルース（ははっ！良いのか！？）

ファイン（べ、別に！あんななんか速く人間界に帰ってしまえば良いのよ！！）

口では優しい所はなかったけど……心の中ではとても暖かい優しい感情を持っていた……。

ブルース「あいつなりの優しさなのかな……。」

そして俺達は、何とかライチュウの家まで歩き通したのだった……。

お茶をしながらいろいろな話を話した。

ライチュウ「さて……。」

人間だった事……

バッジ集めの理由は話さなかったけど……。

ライチュウ「ルールは2対2の戦いだ！
最後まで眼を開けていた者こそが……！」

ブルース達
『勝つ……！』

俺は………。

どんな事があっても絶対に………人間界へ………

………帰るんだ………！！

十、これは夢？（前書き）

ブルース「夢…だったのか……。」

十、これは夢？

真っ暗だったフィールドが全てのライトで明かりを燈した。

そしてブルース、ファイン、ジムリーダーとの戦いが始まった。

ライチュウ「俺は、ライウ！聞き忘れてたけど名前を覚えてくれ！」

ブルース「俺はブルースだ。」

ファイン「ファインです！」

シャワーズ「私はシャーズ、宜しくね。」

審判「この私、ハッサムが審判を務めます！これより、ブルース、ファイン対ライウ、シャーズのダブルバトルの戦いを始めます！どちらが2匹先に倒れた者が勝ち！」

また、体を地面に張り付いている場合は10秒間カウントします！10秒間経ったらそのポケモンは戦闘不能と判断します！！

それでは！ポケモンバトル……。」

ブルース「…。」

ハッサム
審判「始め！！！」

ブルース「ファイン、行くぞ！」

ファイン「ええ！」

ライウ「シャーズ！一気に方を付けるぞ！」

シャーズ「分かったわ！雨ご…！」

ブルース「させるか！体当たり…！」

シャーズ「きゃっ！」

ライウ「…（雨雲を発生させる前に体当たりで防いだか…。だが！）
」

シャーズ「ふふふ 残念ねえ、いくら私を止めたって無駄よ？」

ブルース「何！？」

するとシャーズの体が溶けだすと水になり、ブルースの体に掛かってしまった…。

ブルース「しまった！」

ライウ「まず一匹！」

ファイン「避けて！」

ライウ「無駄だ！電気ショック…！」

（ピカアアア！！）

ブルース「ぐあぁっ！」

ファイン「ブルース！」

ブルースは跪いていた。

ブルース「くっ、こんなところ……！？」

ファイン「ブルース？」

ブルース「か、体が痺れてて……動かない！？」

ライウ「どうやら麻痺したようだな？」

ファイン「……ブルース！何をしてるの！？逃げないと危ない！？」
シャーズ「今、ブルースは麻痺してて動けずらくなつたのよ？」

ファイン「えっ……？」

シャーズ「相手の事を心配するよりも自分の事を心配した方が良いわよ？」

ファイン「くっ！サイコキネ……！
く、苦しい……。」

ファインはシャーズに首を絞められていた。

シャーズ「さあ、そのままノックアウトしちゃいなさ〜い？」

ファイン「なら、尻尾を振るー!!」

ファインは尻尾を降るで思いつきりシャーズに叩き付けたがその体の部分を溶けるで攻撃は1も与えられずにただファインの体を濡らしていくしかなかった。

シャーズ「さあ、絞め落ちされなさい？」

ファイン「くっ、…ブルース。」

ブルース「ちっ、体が動かねえ…。」

ライウ「悪いがブルースの負けだ。十万ボルトオオオ！」

ブルース「ぐあああああああ!!!!」

そしてブルースは気を失った…。

ファイン「…ブルース!？」

シャーズ「さあ、お次はファインが気を失う番よ？」

ファイン「くっ…（意識が掠れて来た…。）」

ライウ「審判、カウントを頼む。」

審判「カウントします！10、9、8・・・。」

（あれ…、俺はどうしたんだろう…。
死んじゃったのか？）

（ブルース！ブルース！？起きなさい！？もう朝よ！？）

誰の声だろう…。

もう朝って…今は昼じゃ…。

ブルース「はっ！」

そしてブルースは思いっきり起き上がった。

ブルース「こ、此处は…一体何が…。」

ブルースの見た物は人間界で・・・俺の部屋で俺の布団・・・そして。

お母さん「何時まで寝てるの！？」

起きなさい！？

今日は学校でしょう？

遅刻しちゃうわよ！？

今日、日曜日に学校があるんじゃないの…！？今日は終業式でしょ

！？」

ブルース「…学校？」

お母さんの声が居間から俺の部屋まで聞こえてきた。

ブルース「ポケモン…あれは夢だったのか…。

だとする…やばい！

遅刻する…！！」

そして俺は学校の制服を着て鞆を持ち、お母さんのいる居間へと向かった

お母さん「遅いわよ！？早く朝食べちやいなさいよ！？」

ブルース「分かってるよ！あつ…そうだ、此処って人間界だよな？」

お母さん「急に何を言ってるの！？人間界に決まってるでしょ！？

早く食べ終わりなさい！！」ブルース「…何だ、夢だったのか…。

全部…夢だったのか。」

ブルースはほつと胸を撫で下ろし朝を素早く済まして学校へ走って向かった。

<キーン、コーン、カーン、コーン>

ブルース「やべっ！遅刻になる！何とか間に合え…！！」

ブルースは必死に走ったが…。

先生「それでは出席を取ります。」

『ガラガラッ!!』

ブルースは教室の扉を開けたが。

ブルース「はあ…、はあ。間に合わなかったかあ…。」

先生「ブルース、遅刻だぞ？

お前が遅刻するなんて滅多にないのにどうしたんだ？

まあ、早く席に座りなさい。」

ブルース「はい、すいません。」

ブルースは自分の席に座った。

<キーン、コーン、カーン、コーン>

そしてホームルームが終わり5分間の休憩。

友達「ブルースが遅刻するなんて何かあったのか？」

ブルース「いや、そういえばレッグが見かけないんだが？」

ブルースはレッグの事を聞いてみた。

友達「レッグ？誰だそいつは？」

ブルース「えっ!？」

何故か知らないが人間界に戻ったブルース…。

そしてレッグの知る者が忘れる者となっていたのだった…。

十一、知る者と知らぬ者（前書き）

ブルース「人間界に戻れたあああ!!」

十一、知る者と知らぬ者

友達「レッグ？誰だそいつは・・・？」

ブルース「え・・・、何を言っただよ・・・。

俺達と同じクラスだぞ！？ほら、あそこに机・・・が・・・。

」

ある筈の物がなかった。

レッグの机が・・・。

レッグの座る机は真ん中なのだが・・・。

その真ん中にあるレッグの机が何もなかった・・・。

友達「お前頭可笑しくなっただんじやないかあ？」

ブルース「何言っただよ！？」

・・・じゃあ、言うがあの机は何時からないんだ？」

友達「・・・はっ？俺達がこのクラスに入る時まで無かっただろう？」

ブルース「・・・なっ。（まさか・・・、いや、だがあの目は本当に嘘でもない・・・いや、知らない目だ・・・。

それに・・・、最初からあの机が無かったとしたら・・・何故、あそこだけ空いてるんだ・・・。

まるで・・・、そのまま消しゴムで消したかの様な・・・レッグに関するモノ・・・そして・・・完全にレッグの存在を誰もが知らない・・・いや、知る筈がないと言うのか・・・。

何でだ・・・。。。。そうだ・・・。全てあの占い師の野郎だ・・・！)

糞野郎がああああ!!」

ブルースは教室中に叫び、クラスの人達はブルースを見た・・・。

友達「ど、どうしたんだよ？そんなに怒って・・・！俺、何か悪い事言ったのか!？」

ブルース「あの野・・・!」

『気づかれたかな?』

ブルース「何!？」

するとブルースの頭の中から何処かで聞いた様な声が・・・。

『流石、ブルース君。

・・・くくく』

ブルース「・・・（お前はまさかあの腐った占い師か!?）」

『腐ったとは酷いなあゝ私は歴とした占い師だよ・・・?』

ブルース「黙れ!!」

「いや……、それとも……死を宣言する死神かな？」

ブルース「（な……？）」

「それ以上深入りをするな．．．、さもなければ．．．。レッグ以上の苦しみを受けるだけだ．．．。」

私に逆らわなければ夢縛りを解いてあげよう……。ブルース君？……くく。』

ブルース「……（黙れ！あの世界にはレッグがいるんだ！！）

レッグの呪いの解き方をその汚い口から吐かせるぞ……！！

こ の 野 ろ
・ ・ ・
・ ・ ・

」

占い師「邪魔する様だねブルー」ス君？

言っておくが君はもう……私の手の内だよ……？

よく……覚えとくが良い……くくく！
 ㊦

そしてブルースは睡魔に襲われたのだった。

（ブ・・・ルー・・・ス、）

（・・・ん？誰だろう俺の名前を呼ぶ人は・・・。
いや・・・この声はもしかして・・・。）

ファイン「ブルース！！はあ、・・・はあ。
もう・・・だ・・・め・・・。」

カー杯、首を絞められながらもブルースに声を掛けたが・・・
ファインは到頭気を失ってしまった。

シャーズ「絞め落ち完了よ。」

ライウ「うん、こつちも完了だ・・・。」

ハッサム審判「7、6、5、4・・・。」

（俺、どうして眠ってたんだっけ・・・。
そっだ・・・、人間界に！？あいつを、糞野郎に呪い
を解く方法を・・・！！）

ハッサム審判「3、2……………」

ライウ「……あつけないぞ……ブルース……。」

ライウはフィールドから離れようとした……。その時！？

ブルース「糞野郎がああああああ……！」

ライウ「何！？」

ブルース「レッグを……！俺の達を救うんだあああああああ
あ……！」

ライウ「な、何て……咆哮だ……！鼓膜が……。」

シャーズ「何！？この気迫は！？」

ファイン「……………うう……………ブルー……………ス……………」

ライウ「ふん！そう言うのを俺は期待してるんだ！来やがれ！！挑
戦者、ブルース……！」

（待つてろよ……レッグ）

決着へ……。

十二、頭脳VS雷！（前書き）

シャーズが本気に！？

十二、頭脳VS雷！

ブルース「負けてられるかあああ！」

ファイン「ブ…ルース。」

ライウ「…（何かが変わった…。
来る…、ブルースの本気が…。）」

ブルース「…（だが、どうやって、戦うか…。
…そうだ！）」

ファイン「ブルースが頑張ってるのに…私も頑張らなくちゃ…！」

ファインは10秒カウントの前に立ち上がった。

ブルース「ファイン！！あのライウに勝てる方法が一つだけある！
！」

ファイン、シャーズ、ライウ『えっ！？／何！？』

ファイン「…本当なのね。」

ブルース「嗚呼、そうだよファイン！」

ファイン「なら、心で話してブルース！」

ブルース「えっ？」

するとファインは目を閉じてリラックスをしていた。

すると…。

ブルースの頭の中からファインの声が聞こえてきた。

そう、これは…。

ブルース「…（こ、これはテレパシーか！？）」

ファイン「…（ええ、そうよ！さあ、ブルースの考えた作戦を聞かせてくれるかしら？）」

ブルース「…（ふふっ！）」

二匹は心で話し合い作戦会議をした。

ライウ「シャーズ、嫌な予感がする！

彼等の作戦実行の前に仕留めるぞ！」

シャーズ「ええ！！

ハイドロポンプ！！！」

するとシャーズはファイン達にハイドロポンプを放ってきた。

ブルース「行くぞ！」

ファイン「分かった！」

二匹はそのハイドロポンプを避けた。

ライウ「今だ！十万ボルトオオオ！！！」

その外したハイドロポンプの地面に強く打った飛沫を利用するかの様にライウは十万ボルトを素早く放つ。

ファイン「テレポート！！！」

するとブルース達は姿を消した。

ライウ「何！？」

シャーズ「ライウ！後ろよ！！」

ライウ「後：！？」

ブルース「捕まえた！」

ブルースはライウを背中から押さえ付けた。

ライウ「ふっ！俺は電気タイプだぞ！？」

俺に触れたらお前は電撃を喰らう嵌めだ！！」

更にブルースを逃がさない様に腕を掴んだ。

ライウ「十万ボルトを最大に溜めるまでだ！！」

ライウは相手を一撃に倒せるぐらいの十万ボルトを充電していた。

ブルース「…（さあ、どんどん溜める！）」

ライウ「充電完了だ！！さて！十万ボルトを！いや百万ボルトを味わって貰うぞ！ブルース！！」

さあ、終わりだあ喰らえ！十万ボ…！！」

ブルース「よし！喰らえ！砂だ！！」

ライウ「何！？」

ライウ「ぐあ！」

少量の砂を持っていたブルースはライウの目に砂をかけた！

ライウは思わずブルースの掴んでいた腕を離してしまい、ブルースは瞬時に離れた。

ライウ「逃がすか！十万ボルトおおお！！」

ブルース「来た！！今だファイン！！」

ファイン「ええー！！」

ライウ「何！？」

ファイン「サイコネシス！！」

ブルース「まず一匹！チェックメイトだ。」

シャーズ「あつ！ライウ！！電撃を放つ…！」
ブルース「もう遅い！」

ライウ「ぐああああああ！！！！！！」

そして、ライウは自分の溜めた十万ボルトを自ら受けてしまった。

ハッサム審判「ライウ、戦闘不能！！」

ブルース「よし！！」

ファイン「作戦成功！」

二匹はガッツポーズをしていた。

シャーズ「なる程ね…、ライウの尻尾をファインのサイコキネシスで尻尾を外した訳ね…。」

ブルース「そうだ、ライウは尻尾を地面に刺さない限り、ライウは自ら感電する！それを俺は狙っていた！」

シャーズ「頭脳の勝利ね……。」

ブルース「電撃がなけりゃあ怖くはない！
一掃と言う言葉も逃げ切れない雷雨もない！！」

シャーズ「…ふふふつ、ブルース、ファイン、良く頑張ったわね。

ライウを戦闘不能にするなんて大した者ね。」

ブルース「まあな。あとはシャーズだけだ。
だから俺達の方が有利だ負けを認めてバツジをくれよ?」

シャーズ「…ふふふ、ははは」

ファイン「…!?!」

ブルース「何が可笑しい!?!」

シャーズ「ライウを倒せただけでいい気になると痛い目に会って
言う事を教えてあげようと思ってね。

…審判!ライウを担いで飛んでいて下さい。」

審判「分かりました。」

ファイン「何か…、嫌な予感がする…。」

シャーズ「言つとくけど私は強いから。」

それとね、一掃って言うのは逃げ切れない雷雨はライウが考えた戦
略。

けど、私の戦略は…フィールド全て冠水よ!!」

ブルース「何!?!」

ファイン「か、冠水!?!」

シャーズ「見せてあげる!私の…本気を!!」

本当の最終決戦へ！！

十三、後半戦！（前書き）

更新遅れてすみません！

ブルース「ったく！何やってんだ！」

許して??

フィン「知らない」

うっ…（涙）

十三、後半戦！

前半戦、何とかライウを倒し残り一匹の所…。
シャーズは自分の強さを宣告した…。

前半戦終了後…後半戦への戦いが始まるうとしている…。

”一掃”と言う、本当の恐ろしさを…。

シャーズ「ライウの弱点を知っていたって事は、私の事も知っている事にも考えられるわね。」

ブルース「嗚呼…、最悪な事を知った。ここからは冷静にいかないと奴の思い通りになってしまう。シャーズの罠に飲み込まれたら…終わりでだ。」

ファイン「ブルース…手足が…。」

ブルースの手足はライウとの戦闘よりも震えていた…。

ライウを倒した事の嬉しさが一瞬にして、再び…絶望感へと化してしまったのだった…。

ブルース「ファイン、俺達は負けるかもしれない状況を選択（作って）してしまった様だ…。」

ファイン「どういう事…？」

ブルース「簡単に言えば、先に倒す相手を間違えてしまった様だ…。」

フアイン「…!?!」

ブルース「ライウが入れば、好き放題に水を放出しない…。それはシャーズの歩める範囲を無くして行く様に…。シャーズは本気を出したくても出せなかったんだよ…。」

フアイン「あつ、そうか…！
フィールドを全て濡らして（行き場をなく）しまえばライウの電撃で感電してしまうから…！」

ブルース「そうだ…！
だが、選択を誤った事だったとしても…俺達は雨よりも雷の方が恐怖でライウの事にしか目に入っていなかったかも知れない…。それは選択を誤ませられた…。
いや…、どっちを先に倒したとしても…絶望の選択しかなかったかも知れない…。」

もし先にシャーズを倒してしまえば…シャーズは倒れる前に、フィールドを全て濡らすだろう…。シャーズの最後っぺってやつだ…。そして、逃げ場も歩める場所も無くし…。
逃げれない俺達は、ライウの電撃を喰らいたい放題になるだろう…。そして今、俺達はライウを先に倒した…。
これからシャーズは思い通りに、存分に戦えるんだ…。」

フアイン「え!?!」

シャーズ「そろそろ話し合いは終えた方が良いわよ?」

ブルース「今、終えたさ…。」

シャーズ「行くわよ！？雨乞い！！」

すると再びシャーズはフィールド内に雨を降り出した…。
フィールドの上には雲が一つ、二つ出来ていた。

シャーズ「私は、自ら強くなれるタイプ！

もっと降れ！雨乞いよ！雨雲を多くし！土砂降りの雨を降りたまえ
！！」

するとシャーズの雨乞い（祈り）によってフィールド内に満たされる程の雨雲が出来た…。

ブルース「何！？無数の雨雲！？けど、簡単に雲を作れる物なのか
！？」

ブルースは思った。

余程の事に…。

太陽も熱もないのに…。

どうして、蒸気の塊が出来るのかと…。

シャーズ「不思議でしょう？

条件は3つで出来た雲よ。」

ブルース「何！？」

シャーズ「1つ目は地面が湿っていた。

2つ目はライウがでかい雷撃は放って湿った地面が熱のある感電
そして…

私が今…熱風を吹き掛けている事よ！！」

ブルース「…熱風？」

ファイン「…嘘！水タイプが炎タイプの技を使えるなんて…。」

ファインは見た、シャーズの周りは蒸気として雲になって行くのを…。

シャーズ「そう思うわよね、でも私はジムリーダーだからね。」

すると雨がざあざあと降ってきた。

まるで…、滝にでも当たっているかのような大粒の雨が…。

フィールド外の扉は全て完全に閉められている。

審判もフィールドの中にはいなかった…。

ブルース「凄い…。」

これが…、シャーズの戦いか…。」

シャーズ「私は身を隠させて見えない所から攻撃させて貰うわ…。」

するとシャーズは急に水のように溶けた…。

シャーズの技『とける』だ…。

ブルース「な！？シャーズの姿が水に…！？」

ファイン「ブルース気をつけて、相手は水タイプで自在に水を操れる。」

ブルース「ああ、分かってる…！」

警戒している内に水は貯まって行っただけ…。

ファイン「このままだと息が出来なくなるだけよ！？ブルース！」

ブルース「まさか、初めからそれが狙い！？」

「ふふふ、そうよ。

貴方達は息が出来なくなるだけ…。

けど、息が出来なくなるまで待ち続ける訳には行かないわ…ハイド
ロポンプ！」

すると水の放水がファインへと向かった。

ファイン「きゃっ！」

ブルース「ファイン、危ない…！」

《ばしゃああん…！》ファイン「…！？

ブルース「…！」

ブルース「けはっ…！かはっ…！鳩尾に入った…。息が苦しいぜ…。

」

ファイン「ブルース、大丈夫！？」

ブルース「あ…、嗚呼。」

ファイン「…私の為に」

ブルース「気に…すんな、勝とう…一緒に…。」

ファイン「…うん／＼。」

ブルースがかつこよくて優しいブルースが見えた…そんな気持ちが
出たせいか、ファインの頬は赤く染まっていた…。

シャーズ「二匹で見つめ合ってんじゃないわよ！（なんか悔しい！）

波乗り！！」

するとシャーズは雨で出来た水溜まりで波を作った。

ブルース「何だあれ！」

ファイン「ブルース！私に捕まって！！テレポート！！！！」

するとファインとブルースはテレポートで大きい波から逃れた…。

ファイン達はシャーズの技を全て避けている間にフィールド内は1
0分の8が水に満たされ…ブルース達は水にぶかぶかと浮かんでいた。
た。

ブルース「くっ！どうすれば…どうすれば！（この水全てをなくす
事が出来ないのか！？）」

シャーズ「手詰まりの様ね！？

…そろそろ観念しなさい！！

フィールドの扉を開けてあげるから！」

ブルース「…！？（扉を開ける！？）」

ファイン「ブルース、そろそろ降参しよう！？
また、チャレンジを…」

ブルース「いや、しなくて良い…。」

ファイン「…どうして！？このままじゃ私たちは…！」

ブルース「ふっ！勝てる戦いを見逃す訳には行かないねえ…！」

シャーズ「何！？」

ファイン「えっ！？」

ブルース「ファイン、もう一回テレパシーだ。」

シャーズ「勝てるですって？この状況でまだ勝機はあると言っの！
？」

ブルース「分かったか？ファイン。」

ファイン「ええ…！」

シャーズ「そんなに、苦しみたいなら…やって（苦しめて）あげる
…！」

ブルース「ファイン！」

「ファイン「ええ！サイコキネシス！」」

するとファインは溶けるから解除されているシャーズにサイコキネシスで動きを止めた。

シャーズ「止めたぐらいじゃ、水は止まらないわよ!？」

ブルース「それもそうだな！

行ってくるファイン!!はおう…。」

ブルースは口の中一杯に酸素をため……。

《ちやぶ…!》

ブルースは水の中に潜った…。

「シャーズ、いい、一体何処へ…。まさか!？」

ブルースはフィード外にある扉へと近づいた。

ブルース「…（扉が…重い…。水圧でやられてるからか…。」

ファイブ・ブルースは天才ですね……。

最後の最後まで一手を考えて：ブルースは言っていました。貴方の口ヒントで勝機の一手は開けた：と。」

「シャーズ、さ、させてたまるか！！」

「ファイン、私たちの勝ちよ！」

ブルース「……（息がなくなる前に！開けええええええ！！）」

するとブルースは扉を少しずつ開けて行った…。
すると…。

《ざばああああああああああ！！！！》

フィールドに貯まっていた水はブルースが開けた扉へと勢い良く出て行った…！

それと同時にシャーズにかけたサイコネシスを解き、シャーズとファインは水と共に流れて行った…。

シャーズ「きゃああああああ！」

ファイン「ブルースううう！！」

ブルースはと言うと死ぬ思いで開けた扉にしがみついていた…。

ブルースは息苦しくしていた。

ブルース「ぐっ…（ファイン…！）」

ブルースはファインが飲み込まれていくファインの手を上手く掴み離さずになっていた。

ファインとブルースは息がなくなるまでの勝負であった…。

シャーズも自力で泳いでいたが水流に勝てずに開けた扉の近くの壁に頭を打ち気絶した…。

ファイン「（シャーズさん！）」

…ファインは気絶したシャーズの手を掴んだ。

ファイン（このままじゃ息が出来なくなつて死んじゃうよ！一旦レポートで外にしよう！？）

ファインはテレパシーで話しかけた。

ブルース（分かった！）

ファイン（うつ…テレポート！）

そしてファイン達は何とか息が出来る場所へと移動し、審判とライウがいる場所にいた…。

（……っ。。）

シャーズ（誰だろう？）

誰が私を…呼んでいるの？）

ファイン「シャーズさん！」

ブルース「おゝい、聞こえるか！？」

シャーズ「うつ…」。

此処は…？」

シャーズは目を覚ました…」。

ライウ「此処は外だよ…」。

シャーズ「あれ、ライウ？」

ブルース「ライウは当分前から覚めていたらしい…」。

シャーズ「…そうだ、試合は！？」

ファイン「終わりましたよ？」

シャーズ「私たちの勝ちよね！？」

貴方は、扉を開けたんだから！」

ブルース「観念するとは一言も言ってない…」。

それに、…先にシャーズは10秒間気を失った…。俺達の勝ちだ。
シャーズ「で、でも！」

ライウ「シャーズ…、俺達は負けた…。負けたんだ…」。

シャーズ「…はあ、分かったわ。認める…」。

ライウ「審判、…判定を頼む。」

ハッサム「はい…！」

シャーズ戦闘不能!!

よって!ブルースとファインの勝利です!!」

ブルース「良っし!!」

ファイン「やったあ!」

二匹は喜んで喜びまくっていた…。

ライウ「俺達、ブルース達の戦力ではなく、頭脳で負けたな…。」

シャーズ「ええ、私たちの目の前に来たチャレンジャー達は全て戦力で立ち向かって来たけど…。」

ブルース達は頭脳で挑んできた…。

私たちの力を利用するかの様に…。」

ライウ「そうだな…。」

今だに俺も信じられないよ。

戦力じゃなくて頭脳で負けるなんて…。

けど、あいつらはきつと…。」

ブルース「やったなファイン!」

ファイン「ええ!!」

ライウ「ブルース、ファイン…。」

ブルース「…?」

ファイン「えっ？」

ライウはブルース達に近づいた…。

ライウ「俺達が負けた証にこの”雷の根性” ウィシュバッジを捧げる…。」

ブルース「あつ、これがウィシュバッジ…。」

バッジは2、3?で二つの金色の輪、いや水面が輪つかになった様な感じで、その上に中心は雷で周りには小さい雫がぽつぽつとついている…。

とにかく綺麗である。

ファイン「綺麗…。」

ブルース「嗚呼。」

ライウ「さあ、このバッジを貰ってくれ…!」

ブルース「はい。」

ファイン「はい!」

そしてブルース達は大逆転勝ちとなり… バッジを受け取ろうとしたその時…。

ブルース「…!?!」

ライウ「どうしたんだ？ブルース？」

ファイン「ブルース？」

ブルース「いや、何でもな…」

占い師【これ以上、俺に近づくな…！
さもくば……！】

ブルース「うつ、ぐあああ！頭があああ！」

頭の中から、いや体全体から奴の声が聞こえた。

ファイン「…ブルース！？」

ライウ「ブルース！？しつかりしろ！？」

シャーズ「し、審判さん！ブルースを運んで！」

審判「は、はい…！」

そして凄い激しい頭痛がブルースを襲い気を失った…。

占い師【馬鹿者めが…

そこまで邪魔をするなら仕方ない…くくく！】

続く…

十四、挑戦者レウス！！（前書き）

レウス登場！

レウスの種族は
サンダース！

<一応>

ブルース：ブラッキー

ファイン：エーフィ

ライウ：ライチュウ

シャーズ：シャワーズ

以上！！

ブルース「ん？」

気にしない！

十四、挑戦者レウス！！

ジム戦勝利後…

ブルースは占い師の声がし、激しい偏頭痛を起こした…。

それから3日が経ち…

ブルースは、ライトニングシティーポケモンセンターに入院していた…。

ブルース「ううん…、

……………此処は？」

ファイン「ブルース！？目が、覚めたの！？」

ブルース「あ、ああ。」

目を開けるとそこにはファインがいた…。

ブルースはキョロキョロと周りを見回して、此処は何処かと思っていた。

ファイン「此処は、ポケモンセンターよ…。

ブルースは3日間寝たまんまだったわ…。

ブルース「3日間も？」

ファイン「ええ…。」

ブルース「俺、あんとき…激しい頭痛で…」

ファイン「そう、ブルースはその後気を失ったわ…」

ブルース「何かあるの？」

ブルース「いや…あつ、そうだ！あいつ…！（占い師め…！）」

ファイン「何かあるの？それよりあいつって？」

ブルース「あつ、いや！何でもない…」

そうだ、それよりライウ達は？」

ファイン「…ライウ達はジムの挑戦者と戦ってるころかしら…」

ブルース「…挑戦者が、ライウ達は強いから勝てるのだろうか…？」

ファイン「さあ、ね。」

それより、何かあるなら私に言ってよね…」

今言えないなら、何時でも相談のるから…」

ブルース「有難う、ファイン…」

そして一方ライウ達は…

挑戦者との戦いが今始まろうとしていた…

ライウ「挑戦者、名を申せ…」

「レウスだ…」

シャーズ「良い名前ね、種族はサンダースかしら？」

ライウ「らしいな…、しかし、レウス！

挑戦者は君だけかい？」

フィールド上にはシャーズ、ライウと挑戦者のレイズだった…。

レウス「ふつ、俺だけで十分だ…。」

ライウ「ふつ、十分…か、なめられたもんだよ。ジムリーダーの強さを見せてあげるよ…！
いくぞシャーズ！」

シャーズ「ええ！」

ハッサム審判「これよりライウ、シャーズVSレウスの戦いを始めます。」

それでは、始め…！」

ライウ「うおおおお！」

シャーズ「ハイドロポンプ…！」

レウス「その程度…か」

ライウ達の戦いが始まり、ブルースが起きて…、ポケモンセンター
を出る事にした…。

ブルース「これでよし！つと、…ファイン、この3日間迷惑かけた

…。
許してくれ…。」

ファイン「なっ／＼／！
べ…別…！いい、良いわけ…良いわけないでしょう／＼／！？」

ブルース「本当に…」

ファイン「それから！謝る事なんて…しなくて良いよ／＼／。」

ブルース「…有難う。」

ファイン「ふん／＼／！

さあ、準備が終えたらライウ達に別れの挨拶をしに行くわよ…！？」

ブルース「まあ、そうだな…（ついでに、挑戦者を見ていくか…。）
」

ブルース達は準備を終えてジムへと向かった…。

ライウ「十ま…！？」

レウス「ミサイルバリ…！」

ライウ「な、速い…！」

ライウはミサイルバリをすれすれに避けた…が。

レウス「高速移動…！」

レウスは自分の脚力（速度）を上げた…。

シャーズ「ライウ！スピードを上げたわよ！？」ライウ「分かっている！」

レウス「電光石火！！」

ライウ「ふっ！こちらも向かい打つ！！電光石火！！」

だがライウとレウスの距離が1mぐらいでレウスは跳んだ…。

この技は…！

ライウ「何…（フェイント！？）！？」

レウス「ミサイルバリ！！」

ライウ「ぐあ！」

レウスは鋭い毛でライウに飛ばし直撃する。
直撃しなかった毛はライウの周りに突き刺し動かさない様に固定する…。

シャーズ「ハイドロポンプ…（ライウをあっさり！？）！」

シャーズのハイドロポンプでライウとレウスは濡れてしまった…。

レウス「放水か…、少し濡れたな…。」

シャーズ「男なら根性出さないライウ！！」

ライウ「ぐう、ああ！！十万ボルトおおお！！」

レウス「…！？」

レウスは逃げる事なく、ライウの電撃を喰らっていた…。

だが…

レウス「…ご馳走様。」

ライウ「な！？」

シャーズ「電撃を喰らっていない！？

と言うより…電撃を全く効いていない…？」ライウ「くっ！」

レウス「お前が放った電撃、倍にして返してやるよ。

十万ボルト！！」

ライウ「ぐあああああああ！！！！」

一方ブルース達は…

フィン「お邪魔します。」

ブルース「あつ、まだ戦ってるのか。

今の状況はどうなってんだろう？」

ハッサム審判「ライウ戦闘不能!!」

ブルース、ファイン「……!？」

ブルース「ライウが戦闘不能!？」

ファイン「相手は、誰なの…!？」

シャーズ「くっ!」

レウス「電光石火!!」

シャーズ「溶ける!!」

シャーズは電光石火を避け、水となり姿を隠した…。

フィールドの周りは水玉が出来ていてそう簡単には気づかれない…。

と思った、シャーズだったが…。

レウス「ふっ、所詮雑魚は最終的に逃げる事しか考えられなくなる
下等生物だったな!」

シャーズ「何ですって!？」

レウス「放電!!」

するとレウスは放電を放ちあちこちに電撃が散らばる…。

シャーズ「な!？」

うわああああ”!!」

ブルース「シャーズが…簡単に!?!」

ファイン「…やられた!?!」

ハッサム審判「シャーズ戦闘不能!よって、レウスの勝ち!?!」

レウス「雑魚は散れ!」

レウス(サンダース)

…圧勝

十五、宣戦布告！！（前書き）

久しぶりの更新です？

完全に小説のストーリーのネタを考えていました？

… 本当は、放置状態です？

すみません！

十五、宣戦布告！！

ジムリーダーを倒した挑戦者レウスは、ジムバッジを受け取った。

レウス「ありがとうございました。」

レウスは一礼をして出口へと向かいながらバッジをケースの中に入れた。

ブルース「あいつ…強え…。」

レウスとジムリーダーの闘いを目の前にしてしまったブルースにとっては絶望感を与えたただだった。
いつか、あいつと闘うのだろうと…。

ライウ「俺達を…無傷で倒す…とは…な。
かなりの、戦闘力だ。」

するとライウはズタズタだった体を起こし、レウスに話しかけた。
だが、レウスは聞く耳持たずにこの場を去ろうとするがライウは話す事を続けた。

ライウ「だが戦闘力がなくとも頭脳で勝つ奴も入ることを忘れるな。
頭脳で闘う奴は相手の力を利用する事を…。」

レウスは足を止め、ライウの方を向く。

レウス「あんたは何が言いたい？

頭脳だけで闘う奴など弱いに決まっているだろう…?」

ブルース「…。」

ライウ「ふっ、それはそうかもしれないな…。

けどそいつらは、例えどんなに小さな光でも、そいつらは歯を食いしばって光を見つけたし勝利へと導く奴がいる…。」

レウス「…ふん、それであんたは俺に何が言いたいんだ?」

ライウ「…だから、自分より強い相手に勝つ奴がいる。

と言うことはどんなにお前が有利の状態になったとしてもその闘う奴は頭脳で逆転勝ちにするかもしれないからだ。

俺がお前に言いたい事は、お前が進む人生…いや、これからお前が闘うポケモン達を…

”どんなに弱い下等生物でも侮るな!”…だ、まあ俺のアドバイスと言った所だ…。」

レウス「…侮るな…か、ふっ、その言葉に期待をして良いのなら…。その言葉…有り難く頂くとするか…。

まあ、ジムリーダーがそこまで言うのだからそれは本当なのかな…。」

ライウ「嗚呼…。

あのブルース達のようにね…。」

ブルース/ファイン「……!?!?」

ライウはブルース達の方に指を向けるとレウスは、ライウが指を向けたブルース達に目をやるとレウスはブルース達の事を聞いた…。

レウス「一つ聞きたい…。ジムリーダー…。」

ライウ「ん？」

レウス「あいつらは…強いのか？」

レウスは問うとライウは目を閉じてこう言った。

ライウ「…強い！」

ファイン／ブルース「…！？」

レウス「ふっ、…そうか、なら…。」

するとレウスは、ブルース達に近づき、笑みを見せブルース達を見つめた。

ブルース「何の用だ？」

ファイン「……？」

するとレウスは足を止める…。

レウス「俺と…闘え！」

ブルース「なっ…！？」

ファイン「えっ！？」

レウスからのいきなりの『宣戦布告!』

ブルースとファイン、レウスの闘いが始まる!?

十六、迅雷の戦い（前書き）

レウスVSブルース、ファイン！！

《ブルース》
ブラッキー

《ファイン》
エーフィ

《レウス》
サンダース

《ライウ》
ライチュウ

《シャーズ》
シャワーズ

感想が欲しいな

十六、迅雷の戦い

勝負を挑んできたレウス、このフィールド上でポケモンバトルが始まる……。

審判「これより、ブルースとファインVSレウスのポケモンバトルを始めます。

ルールは、先に戦闘不能にさせたポケモンが勝ちとなります……。」

ブルース「…何で、こうなるんだよ……。」

ファイン「…さあ。」

ブルース達は、このポケモンバトルを受け入れにくい状態だった……。

まだ、ポケモンバトルをやるとは言ってもいないのに……。

レウス「お前等を、あのジムリーダー達がそこまで言う”強い”と言うのは何なのか……。

俺自信で……、確かめてやる……!」

レウスは戦闘体制になった。

ブルース「あの……、一つ……良いか?」

レウス「…なんだ。」

ブルース「俺達…まだ、ポケモンバトルをやるとは一言も言っていないだが…。」

ファイン「…うん。」

ブルースにとっては、意味不明…。

いきなり、ポケモンバトルを宣言してきたこいつに一言いいてえ…。

” 困る！！ ”

普通、納得させてから、ポケモンバトルを始めるだろう！？

なのに、納得させずに…

ポケモンバトルをやらされるなんてな…。

ライウ達も、何気に見学してやがるし…。

レウス「ふっ！問答無用だあ！！」

ブルース「おい！

人の話ぐらい聞けよ！」

ファイン「やるしかないわ、ブルース。」

レウス「さあ、審判！

戦闘開始だ！」

ブルース「…（この、戦闘馬鹿め…。）」

そして、3匹は戦闘体制に構えた…。

審判「それでは、ポケモンバトル…開始！！」

レウス「いくぞ！

”電光石火！！”」

ファイン「ふっ！」

そして、ファインはすれすれに避ける。

ブルース「ファイン！

あいつは、攻撃ではなく

”素早さ”を武器としている！

だから、距離と警戒心を持って戦うぞ！」

ファイン「わかったわー！」

レウス「（あいつらには、”頭”があるか…）

なら、これならどうする！？

”高速移動！！”」

レウスは素早さを上げた…。

ファイン「は、速さを上げた！？」

レウス「まず、お前からだ！！
”電光石火！！”」

数メートルからレウスは猛烈なスピードでファインに向かってきた。

ファイン「き、来たよ！？」

ブルース「慌てるなファイン！！

スピードを上げたとしても、高がスピードはスピード！

攻撃も防御も上げてなければスピードは止めれる！！

ファイン！

あいつの前脚の片方だけで良い！

動きを止めてくれ！」

ファイン「分かったわ！

”サイコキネシス！！”」

レウス「うぐっ！？

何…！？」

すると、サイコキネシスでレウスの片方の前脚を止めた事により、
レウスはスピードを落とす事だけでなく、レウスは躓かせる事も出
来た…。

シャーズ「す、凄いよ…ブルース！」

ライウ「ブルース、考えたな…。」

見学していたライウ達は、見ていた…。

レウス「ぐっ…！」

ブルース「どうだ！？

いくら、脚が速くても、その片足だけでも止めれば動けなり、お前は躓く…！」

…それにお前は、足の関節を逆に曲げた！
元々の自分の足の速さ

脚力を上げる技”高速移動”に、スピードを出す体当たり”電光石火！”

そのスピードによつて！

関節へのダメージは更に加算する…！」

レウス「ぐっ、くそお！…動きを止まられただけでダメージを負っただ…！？そして、俺のスピードをダメージへと利用した…。
う、迂闊だった…。」

ファイン「ぶ、ブルース…そこまで、考えてたの？」

ブルース「嗚呼。」

ファイン「…す、凄い。」

ブルース「まだ、やるのか？

それと、此処のルールは、10秒間寝そべってたら負けになるんじゃないのか？

…審判！？」

ハッサム「は、はい！
カウントします！

10…9…8…、」

レウス「…ぐつ。

俺を…、…俺を。」

審判「…7…6…5…、4…3…」

レウス「俺を…なめるなああああああ！！！」

審判「…！？」

ブルース／ファイ

ン
『…！？』

レウス……立つ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7095v/>

夢の旅

2011年11月24日13時48分発行